

リガール暮らしの架け橋

京を拓く The Frontiers of Kyoto

□ 77 □

た。円高不況に見舞われ経営していた工場を廃業しての転身だった。

「たまたま新聞広告で求人を知り、福祉の世界をよく知らないまま入り、職員をしながら静かな環境で税理士になる勉強をしようと思っ。働いてみて福祉のとりこになりました」

「人の暮らしを支える福祉の仕事のやりがいと面白味を感じ、一方で「福祉施設の経営の厳しい規制に驚いたという。

「サービスの質を日々改善し高めること、人材育成が大事であるのは経営者の常識。でも当時の福祉の世界では厳しい規制があり質のいいサービスができず、言わば経営をしてはいない状態でした。職員数は制限され、措置費と呼ばれる国からの委託費は事業費、人件費、事務費に区分されていました。例えば光熱費でコスト削減努力し人件費を増やそうとしても、国の制度に阻まれてしまう仕組みでした」

「事務長などを経験し、施設管理責任者の施設長に9年就任した。

「そのころから一人の職員が数十人を担当しては、お年寄りそれぞれの事情や人生を理解するのに限界がある。可能な範囲で、少人数に改善できないか」と考え出した。

山田さんらは94年に秋田県などへグループホームを視察に行った。それまでの「収容施設」ではなく、普通の生活と同じように暮らし、生き生きとゆったりした雰囲気、お年寄りは認知症があっても感じさせない生活を送っていた。

「目からウロコの驚きでした」
2000年9月、「施設」の呼称をやめ「住まい」と呼べる特別養護老人ホーム（特養）「ももやま」を京

「伴走」できる介護目指す

共同利用のデイリウムで入所のお年寄りとお話する山田専志さん（左） 京都市北区で、中山和弘さん撮影



「やまだ・ひろし 京都市出身。名古屋市立大経済学部卒業。会社経営などを経て1981年に社会法人に勤務。2012年に地域密着型総合ケアターキータおおじ代表、17年から社会福祉法人リガール暮らしの架け橋理事長。

型施設の推進を02年9月に打ち出し、「ももやま」は国のモデル施設の一つに選ばれた。03年以降開設された特養は、個室ユニット型が中心となっていく。

ある時、重度の介護状態ターミナルケアのみと受け取られた入所女性の人生をテーマに、家族が「ももやま」の職員研修で1時間、講演したことがあった。家族は女性の若いころからの人生を、映像を交え紹介。「母はここで亡くなることのでき幸せでした」と語ってくれた。

山田さんらはショックを受けた。

「入所時に女性は既に寝たきりで、認知症もあり言葉が話せず重度の状態でした。その方の人生まで知らなかった」

介護の場面だけでなく、在宅で元気なころ知り合い、暮らしとかがわり「伴走」できる介護拠点ができないものか。その時をき

名称 社会福祉法人リガール暮らしの架け橋
設立 2017年1月
法人所在地 京都市北区紫野大徳寺町
入所者数(定員) 特別養護老人ホーム51人
(きたおおじ一同区=29人 おんまえどおり=上京区=22人
有料老人ホーム29人
有料老介護ホーム29人)

【篠田